

11 番（小川義昭君）

議席番号 11 番、白政会、小川義昭でございます。 通告に従いまして一般質問を行います。

本市における将来の都市像は「健康で笑顔あふれる元気都市 白山」ですが、今 3 月会議では本市の未来を見据えた諸課題について、深まりゆく長寿社会の中でどのように考えてゆくべきかを申し述べ、市の見解をお伺いしたいと思います。

まず初めに、人生 100 年時代構想及び健康寿命についてであります。

昨年の敬老の日、9 月 17 日に、総務省が興味深いデータを発表しています。これは我が国の 65 歳以上の高齢者の総人口に占める数の推移を取りまとめた調査結果ですが、それによると、我が国では今、総人口に占める 65 歳以上の高齢者の割合が過去最高の 28.1% となり、70 歳以上の割合が初めて 20% を超え、90 歳以上の人口が 200 万人を超えました。

100 歳人口もまた著しくふえて、100 歳の高齢者表彰が始まった昭和 38 年にわずか 153 人だった 100 歳以上の人数は、平成 10 年に 1 万人、平成 24 年に 5 万人を超え、平成 30 年 9 月には約 7 万人に達しています。

我が国がかくも急速に人生 100 年時代とも言うべき超高齢化社会を迎えた背景には、医療の発達、栄養状態や衛生環境の改善などが挙げられますが、ある調査によると、日本では 2007 年に生まれた子供の半数が 107 歳より長く生きるといった推計も明らかにされています。 人生 100 年時代とはまさしく現代日本を指し示す言葉ですが、英国・ロンドンのビジネススクール教授、リンダ・グラットン氏が長寿時代の生き方を説いた著書「L I F E S H I F T」で提言した言葉として知られています。

グラットン氏はその著書の中で、「過去 200 年間、人の平均寿命は延び続けており、そこから導かれる予測によれば、2107 年には主な先進国では半数以上が 100 歳よりも長生きする」と語っています。 その上でグラットン氏は、人が 100 年も健康に生きる社会が到来した場合、80 歳程度という従来の平均寿命を前提に考えられてきた 3 つの人生ステージ、すなわち、教育を受ける、仕事をする、引退して余生を過ごすという生き方、考え方を大きく見直さなければならないと指摘しています。

こうした人生 100 年時代の提唱を受けて政府は、平成 29 年 9 月にグラットン氏を有識者議員として招き、人生 100 年時代の経済社会システムを創出する政策のグランドデザインを検討する人生 100 年時代構想会議を設置しました。構想会議では 9 回にわたって議論が行われ、平成 29 年 12 月に人生 100 年時代構想会議の中間報告、平成 30 年 6 月に基本構想がまとめられています。

人生 100 年時代という超長寿社会はもはや現実味を帯びて間近に迫っており、この時代を生きていく人も行政も、100 年を豊かに過ごす新しいライフスタイルを考えなくてはなりません。

私もまた、教育・仕事・老後といった3つのライフステージで語られてきた単線型の人生観はもはや通用しないのではないかと考えています。恐らくこれからの超長寿社会では、長い人生を通して自分の家族を支えなければならないため共稼ぎ世帯がふえ、家族のありよう、家族の形も変化することでしょう。もとより、100年という長い人生の受け皿は、家族だけでなく地域社会も担うべきものであり、生涯にわたり充実した学習の場を提供するほか、多彩なスポーツや文化芸術活動、地域のコミュニティー活動などが個人の人生を豊かにする社会の構築が何より重要であると考えます。

超長寿社会を世界に先駆けて迎える日本において、多様な人生の再設計は可能なのか。教育や雇用制度、社会保障など国の制度はどう変わっていくべきなのか。このことがこれからの人生100年時代を見据えていく上で、考えなければならない大きなテーマであります。

このような時代の節目を迎える中、本市は、平成29年度からの10年間を期間とするまちづくり指針として、「健康で笑顔あふれる元気都市 白山」をうたう将来都市像を掲げた第2次白山市総合計画を策定し、その実現に積極的に取り組む本市の姿勢を広く発信するため、山田市長は今3月会議において、新たに健康都市宣言の議案を提出されました。私は、まことに時宜を得た都市宣言であると大いに賛同するものであります。同時にまた、私たちにとって、長くなる人生をどう生きていくかが待ったなしの課題ともなっています。このように高齢期がますます長くなる時代において、高齢者のQOL（クオリティー・オブ・ライフ）、すなわち、物理的な豊かさや精神的な生活の豊かさ、さらには、個人が満足し、自立した生活を高めていくために健康寿命を延ばすことが極めて重要であります。厚生労働省の調査によると、平成28年の男性の平均寿命80.98歳に対し、健康寿命は72.14歳、女性の平均寿命87.14歳に対し、健康寿命は74.79歳であります。この差は男性8.84年、女性は12.35年であり、介護や看護を必要とする期間が人生の晩年に男性がおおよそ9年、女性がおおよそ12年もあることを示しています。つまり、この年齢差が大きくなればなるほど医療費が増大するリスクがふえるわけですが、介護されながら寿命だけが延びるのではなく、少しでも健康で生き生きとした生活を送ることが万人の望むところであり、こうした超長寿社会に行政としてどう寄り添っていくのかも気になるころと言えます。

そこで、質問します。

1点目。政府は、人生100年時代を見据えた経済社会システムをつくり上げるための政策のグランドデザインを検討したいとして、人生100年時代構想会議を設置し、平成30年6月に基本構想を取りまとめました。こうした政府の取り組み、基本構想の内容に対し、どのような見解をお持ちか市長にお伺いします。

2点目。本市の男女別の平均寿命と健康寿命及びその年齢差、そして、100歳以上の人口をお聞きします。

3点目。平均寿命と健康寿命の年齢差を縮め、健康寿命を延ばすことによりQOLを

高めることが大変重要です。自分自身の健康を管理する自助努力は大切ですが、このたびの健康都市宣言に当たり、市民の健康寿命を延ばし、平均寿命との年齢差を縮小する支援策をお伺いいたします。